評論文コラム　～芸術論～

難しいと言われている **「芸術論」** について今日はお話しします。

難しい理由の1つに、普段、皆さんが**芸術論に触れる機会が非常に少ない**ということが挙げられます。なかなか日常生活では、目にする機会がありませんし（「新書」、読んでいますか？）、あっても高尚なジャンルだ、どうせつまらないと思って敬遠する生徒が多いと思います。また、いざ芸術論に触れようと思っても**内容が難解で読むのを辞めてしまう**なんて人が多いと思います。

そこで今回は、実際にセンター試験に出題された文章を、

「簡単に要約したもの」 を載せます。

短いので気軽に読めると思います。

読んでみると、新たな視点に気付き、

いつもの日常が一味違って見えたりします。

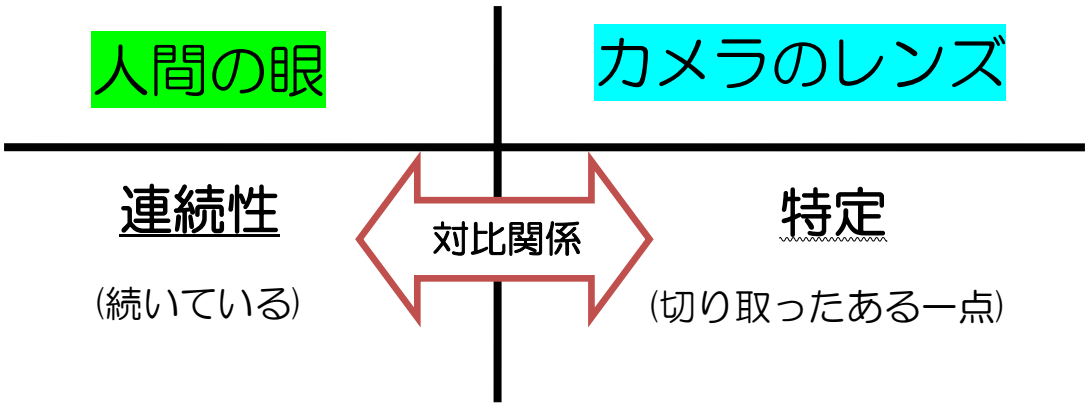
是非、勉強の合間に息抜きとして読んでみてください！

吉田喜重『小津安二郎の反映画』　2005年センター試験(本試)

①「人間の眼」と「カメラのレンズ」は同等の機能を有すると思われがちだが、様々な事物や出来事を「連続的に捉える人間の眼」と、「特定された被写体を空間から切り取るカメラのレンズ」は相反するものである。

筆者は、まず「人間の眼」と「カメラのレンズ」を比べています。
2つは似ている…でも、人間の眼は連続的だ!カメラは特定的だ!と言っていますね。
つまり、人間の眼は「続いている(広がる)」!カメラは「ある一点」!ということです。対比関係は、こんな感じで真逆の特徴を挙げることが多いです。

対比表も作ったので見てみてください



「対比」の文章です！
「対比」はセンター試験で頻出です。しっかりと対策しましょう。
何と何が対比されており、それぞれの特徴や内容は何なのかを、整理しながら読んでいきましょう

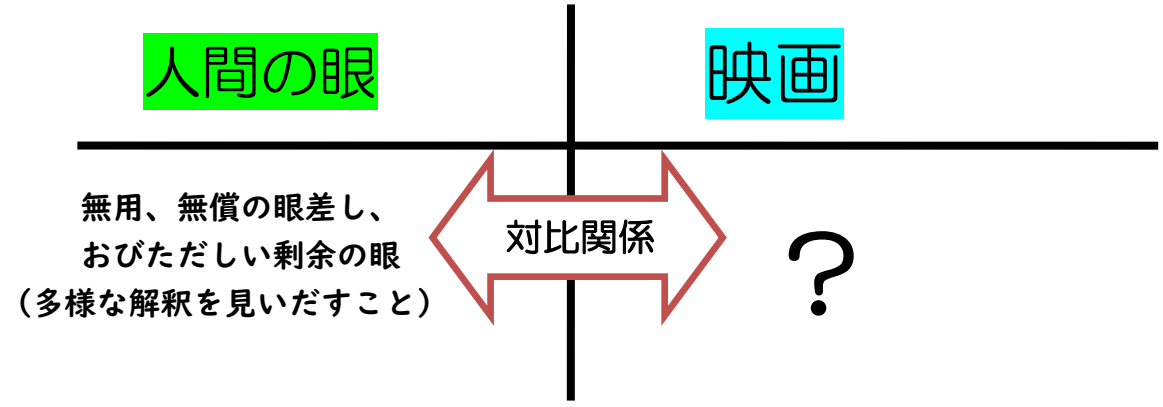
②また、「人間の眼」は様々な視点から自由に眺め、自らの内面でゆっくりと対話し、多様な解釈を見いだすことのできる「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」である。しかし、「人間の眼」を否定するものとして「映画」がある。

筆者は、「人間の眼」は「無用、無償のおびただしい剰余の眼」だ。しかし、「人間の眼」と相反するものとして「映画」があると言っています。
ここで「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」って何だ??なんて深く考える必要はありません。「無用、無償のおびただしい剰余の眼」の直前をチェックしてみてください。「様々な視点から…できる」と書かれていますね。それが、「無用、無償のおびただしい剰余の眼」の内容です。

わかりやすく、図でまとめてみましょう。

様々な視点から眺め、自らの内面と対話し、多様な解釈を見いだすこと　＝（イコール）　「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」　＝（イコール）　「人間の眼」

次に「人間の眼」を否定する、つまり、「人間の眼」と対立するものが、「映画」であると言っています。上の図も踏まえて、まとめ直すと次のようになります

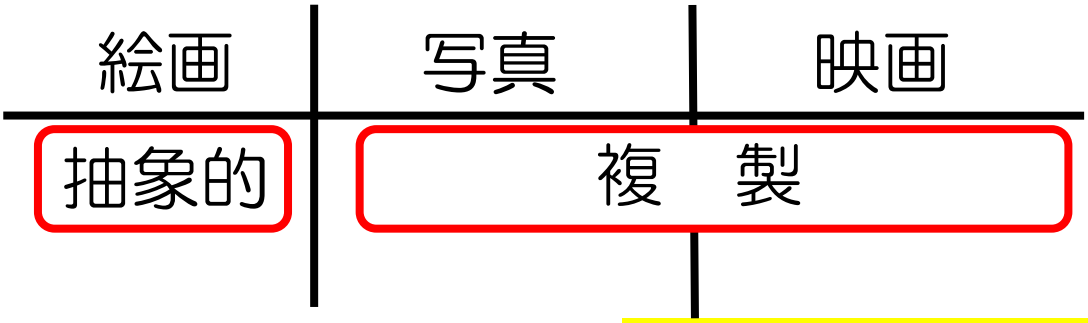


映画の下が「？」なのは、まだ今の時点で情報が書かれていないからです。ということは、次の段落から詳細が明らかになるということですね。

③写真と絵画と映画を比較すると、映画の暴虐ぶりがよくわかる。写真と映画は複製の表現である点で、抽象的な表現である絵画とは異なるように思われるが、見るという行為において考えると、写真も絵画も無用、無償の眼差しによってそれらを見ることができる。しかし、「映画」は一方通行的に流れる時間で人々を圧倒し、視線を抑圧することによって、特定の視点や意味を強要するものである。そのため「映画」は独占的で危うい表現であり、「見ることの死」であると言える。

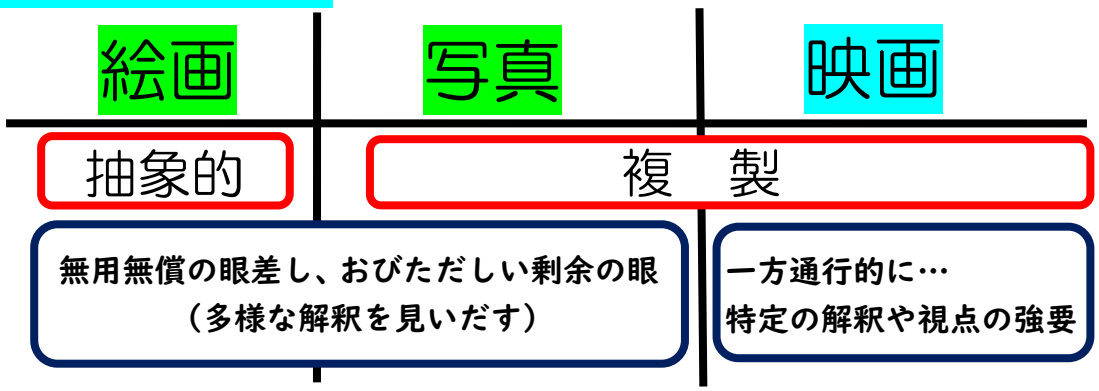
この段落ではまず、映画の説明を行うために、写真や絵画と対比していますね。読んだだけではごちゃごちゃになってしまうので、また図にしながら見ていきましょう。

写真と映画は複製で同じ。対する絵画は抽象的。



「思われるが、」という逆接の表現に注目！大切なのは逆接の後ろの部分！

すると、写真と絵画は、「無用、無償の…」で同じ。反対に、映画は「特定の意味や視点を強要する」　　これを上の図に追加すると

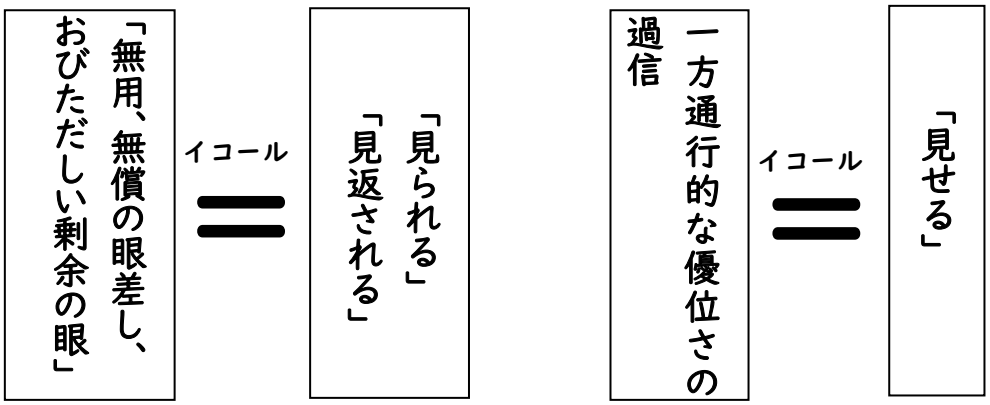


「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」は「多様な解釈」とイコールであると、上での段落で確認しましたよね、覚えていますか。

ここまできたら、上の段落の図の中の、映画の「？」がわかりましたよね。そうです、「特定の解釈や視点の強要」が入ります。

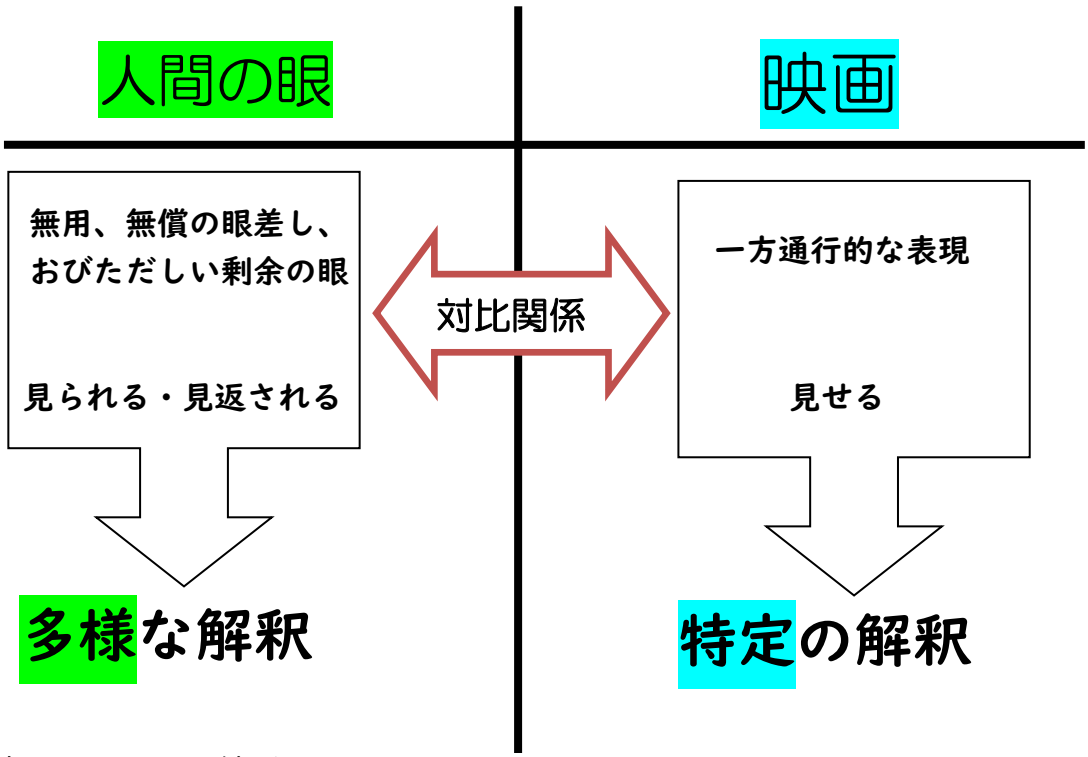
④しかし、その「映画」の持つ特性に反抗しながらも、「映画」を限りなく愛するという矛盾を貫いた存在として「小津安二郎」がいる。彼は映画の一方通行的な優位さを過信して観客に映像を「見せる」のではなく、あえて意味が曖昧な映像を用いることで、「無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼」によって、「見られる」もしくは「見返される」映像を表現したのである。

前の段落でまとめたように、筆者にとって「映画」とは「特定の解釈や視点を強要するもの」でした。しかし、この段落で登場した「小津安二郎」の映画は違ったと言っています。何が違うのかというと、「見せる」ものではなく、「見られる」もしくは「見返される」ものであったと書かれています。
「見せる」や「見られる or 見返される」は新しい言葉ですね。ここでもその直前の文を読むことで、それぞれの内容が理解できます。
図にしてみましょう。



「無用、無償の…」は前に出てきましたね。なんだったかというと、「人間の眼」の特徴でした。また、「一方通行的な」という言葉も、前に出てきましたね。前の段落を振り返ってみてください。すると、「映画」の特徴として、「一方通行的に…特定の解釈や視点を強要」とあります。
それぞれの言葉が、これまでの筆者の言ってきたことの繰り返し、もしくは関連しているとわかりますね。

それでは、前の段落で作った対比図を整理しながら、追加していきましょう。すると、次のようになります。



ここまでまとめると、筆者の主張がはっきりと見えてきますね。
つまり、筆者は芸術とは「多様な解釈」ができるものであるが、「特定の解釈」を強要する「映画」はダメだ!(③段落の、独占的で危うい表現・「見ることの死」等のマイナス表現)と言っているのですね。

すると、①段落の内容も今ならわかると思いませんか。
①段落だけ、「人間の眼」と「カメラのレンズ」を比較していました。内容としては、「連続性」と「特定」の対比でした。ここでも「特定」という言葉が出てきましたね。①段落と②段落以降は別の話のように感じますが、よくよく読んでみると、筆者はじめから「連続性」や「多様性」と「特定」を比較し続けていたのですね。

一言まとめ

芸術は「多様な解釈」ができるものである。
「特定の解釈」の強要は「見ることの死」だ。